

「文系大学院進学者に求められる日本語能力」

お茶の水女子大学 森山新先生

お茶の水女子大学の森山と申します。私の専攻は日本語教育ですので、今までの方々のご発表とは違い、むしろここにお集まりの日本語教育機関の先生方にお話ししたい事柄がかなり含まれていると思われまます。

まず自己紹介ですが、私が日ごろやっていることについてお話いたします。最近、独法化（国立大学独立行政法人化）の影響から、さまざまなことを行っているのですが、今日のテーマと関係することとして以下の3つを挙げてみました。

- ①大学院進学前予備教育（大使館推薦国費留学生）
- ②大学院進学前アフガン交換留学生（大学推薦国費留学生）の日本語教育
- ③大学院進学前研究生・聴講生など（私費留学生）の日本語教育

第一の「大学院進学前予備教育」は、大学院の進学を目指している大使館推薦国費留学生などの学生達に日本語を教えているということです。第二の「大学院進学前アフガン交換留学生の日本語教育」というのは、本学は現在アフガニスタンの女子教育支援を積極的に行っており、毎年カブール大学から教員を留学生として受入れておりますが、その学生たちの日本語教育のことです。第三の日本語教育は、現在本学には250名前後の留学生在籍していますが、その中で日本語教育を必要としている学生への支援として行っているものです。

（大学院入試と日本語試験：お茶の水女子大学の場合）

次に大学院入試について述べたいと思います。本学では大学院入試にあたって一部日本語試験を課している専攻がありますが、理系の関係はほとんど日本語の試験を課しておらず、課しているのは主に文系の学生に限られています。この辺を見ても、大学院入試において、日本語を重視しているのは理系よりは文系であることがわかるかと思えます。そして、出題者の一人として学生達にどんなことを求めているかと言えば、いわゆるアカデミック・ジャパニーズといわれている日本語の能力です。これは日本留学試験と似ているのかもしれませんが、本学の大学院入試も読解力、聴解力を重視した日本語の試験であるということです。昨年までの試験を例にとれば、読解問題と聴解問題が大きな問題で一つずつ出題されてきました。これは要するに大学院に入って日本語での授業がちゃんと聞けるのか、日本語で書かれた専門書が読めるのかという点が選抜の基準になっているということです。その上で、この二つの大きな問題の中に、さまざまな作文力を問う問題が含まれているという形になっていますので、結局、文系の学生達に求めているのは読解力、聴解力、作文力の3つの能力であると言えます。

(2つの言語能力)

「大学院に必要な日本語能力とは」ということが今日のテーマですが、それを考えるにあたって、カミンズ (Cummins) の理論を援用してみたいと思います。カミンズの理論というのは普通、年少者の第二言語習得とかバイリンガル教育に用いられるもので、大学院の日本語教育に用いることはあまりないのですが、それなりに応用が可能であろうということで、今回はこの理論を応用して考えてみたいと思います。この理論では、言語能力を2つに分けて考えています。一つが「伝達言語能力」で、普通私達は **BICS**(Basic International Communicative Skills)と言っています。もう一つが「学力言語能力」で、**CALP**(Cognitive Academic Language Proficiency)とも言われます。簡単に言えば生活日本語が前者で、授業とか勉強、就学に使う専門的な日本語が後者に相当します。そして、ふつう私たちが日本語を学ぶというと、どちらかというと前者が多いのではないかと思います。しかし **BICS** はコンテキストを利用しながら話ができますので、日本語への負担は比較的軽くなります。極端な場合にはほとんど日本語を使わなくてもコミュニケーションが成立することもあります。例えば「となりのトトロ」にはかん太という男の子が出てきますが、ある日の下校時間、雨やどりをしているさつきに彼が「傘を貸してあげる」という場面で「ん！」という表現で通じてしまっています。「いやあ、それではかん太さんが濡れちゃいますから、ちょっと借りられません。」とさつきが言った時のかん太の返事も「ん！」だけです。今度は「いいから使えよ。」という意味です。このように、日常生活における日本語は、日本語自体にかかる負担が相対的に少ない、言いかえれば「高コンテキスト」なわけですが、しかし、**CALP**、すなわち授業でのコミュニケーションは、ジェスチャーなどのノンバーバルな手段というのはあまり使えませんので、「低コンテキスト」であると、そして、専門知識などのさまざまな背景知識等々を動員しながら話を聞いたり話したりしなければならないということで、認知的負荷も高いということです。そうなりますと、**BICS** の方は高コンテキストで認知的付加が低いので年少者の場合、2年程度で習得してしまえますが、学力に必要な言語能力は低コンテキストで認知的負荷も高いため、5～7年かかると言われています。その結果、学習を始めて3年から5～7年という間は、日常生活の日本語は上手なのに、授業についていくための日本語としては十分ではない期間となります。しかし年少者の場合によくあることですが、**BICS**、つまり日常生活での日本語が上手になると、先生や親は、この子はもう日本語が上手になったから、授業でも問題ないだろうなどと安易に考えてしまうわけです。しかし授業に出てみると非常に成績は芳しくない。そうすると、ああ、この生徒は日本語は上手だけど、頭は悪いのではないかと、たいへんな誤解を受けることになってしまうわけです。そのような誤解は本人も持つことになり、自分は頭が悪いんだと自信を喪失する結果となります。

このように考えますと、大学院に必要な日本語能力はどちらなのかを考える場合、やはり後者の **CALP** の方であろうと思われれます。では、大学院進学に必要な言語能力が **CALP** であるとするならば、入学前に教えられていることも最終的にこちらに重点が置かれな

ればならないわけですが、実際の日本語学校などでの教育がそうなっているのかということが問題になってくるわけです。

(研究生になるために)

ところが、先ほどのお話をいろいろ聞きまして、いろいろな準備がなされていることがわかり、非常に安心しました。ついでに申し上げますと、今の時期になりますと、いろいろな留学生から、「私は先生の指導を受けたくて日本にやってまいりました。ぜひ先生の研究生にしてください。」というメールが飛び込んできます。このようなメールを受け取れば悪い気はしませんが、同じようなメールを専門分野と先生の名前だけ変えて、片っ端から全ての先生に送るというのは信用を失うことになり、採取的には相手にされないということが多いですから、やめていただければと思っています。もし本気で研究生になりたいければ、まずはその先生の論文や著書を読み、それに関して質問に行く、もしくはその先生の授業を聴講するなどといったことから始めるべきであると思います。本学の場合、研究生の申し込みは毎年6月と12月になっていますが、研究生申し込み期間のぎりぎりになって、どこのだれかもわからない人をすぐに研究生として受け入れるという先生は多くないと思います。ぜひ、少なくとも募集期間の6ヶ月ぐらい前には準備を始めていただきたいと思います。具体的には、まず大学院で自分が勉強したいことが何であるかを考え決定する。その上でそれに関係する論文や書籍を集める。そしてその著者となっている先生に内容について面会を求めたり、聴講を希望したりして、具体的なアプローチを図る。「先生の論文を読んだのですが、聞きたいことがあります。」そういったメールでしたらおそらく断る人は少なくないと思います。またその学生がどれだけ本気で大学院進学を考えているか、どれだけ将来性のある留学生であるかは、研究計画書を見れば一目瞭然です。私の場合、日本語教育ですが、ただ漠然と日本語教育に関心があり、研究をしたい、このような計画書を見ますと、真剣に考えていないこと、準備が足りないこと、そして疑いとして多くの先生に同じメールを出しているといったことを察してしまいます。その場で研究生として受け入れようとは思わなくなります。そうではなく、先ほどのように、自分の勉強したいことを決めて、何冊かでも専門書や論文を読んだ人なら、もう少し具体的な研究計画が立てられるわけですから、ぜひ研究計画の書き方をご指導いただければさいわいです。私がメールをもらい、少しでも可能性を感じた学生に対しては、研究計画と最近読んだ専門書とその感想を送ってもらうことにしています。何も読んでいないという学生には、それで終わりかそれでもメールを送ってくる場合には、(日本語の) 専門書を読み、感想を聞かせてくださいと言います。本気でない学生はこの辺で引いてしまいます。

(文系と理系の日本語)

1. 日本語の重要度の違い

ここで、文系の日本語といったものを理系と比べてみたいと思います。その違いがわか

りやすいように対照して説明するため、やや強引な説明に聞こえるかもしれませんが、あくまでもこの違いは相対的なものだというふうに考えてお聞きください。これは本学の場合に限られるのかもしれませんが、理系の場合は相対的に授業等々が英語で行われる、あるいは英語でやってもいいという、そういう許容量が高いのではないかと思います。そして日本語というのはもっぱらサバイバル、つまり生活のためという場合が多いと思います。そのようなことから、院試などでも日本語は強要されていないのだと思います。したがって理系の場合は先ほどの CALP、つまり専門の日本語よりは、BICS、つまり生活の日本語程度でよいということになるのかもしれませんが。それに対して文系は、BICS はもちろん基本ですけれども、CALP、つまり専門の日本語まで身につけておいてもらわないと入学後、非常に困ると言えます。専門の授業は基本的に日本語で行われますし、読む文献、論文なども日本語のものが多く、論文執筆や発表もほとんどが日本語で、専門知識は日本に関するものが多く、ということで、日本語能力が非常に重要になってきます。

2. 具体的事例から

(1) 事例 1

ここで具体的な事例をいくつか挙げてみたいと思います。まずアジアからの理系の留学生で、日本語がゼロレベルの学生の事例です。動機づけでは、自分は専門を学びに来た、日本語を学ぶ必要はない、という学生が少なからずいます。つまり日本語学習の動機づけが低い。そうなりますと私達日本語教師にとっては困る部分が出てくるわけです。彼らを指導する専門の先生方もまた日本語教育はサバイバル程度でいいと思っていられっやることが多いようです。もちろん授業が理解できてくれたらなおいという本音は持っていますけれども、あまり強く要求しますと、非常勤講師の確保など、予算の問題が生じるので、最終的には日本語教育はサバイバル程度でいいということになるのだと思います。また非漢字圏の学習者達は、自分たちはあくまでも専門知識を英語で学べればいいという気持ちを持っている場合も多いので、漢字など教えようものなら、それは要らないという形でさらに動機づけが低くなってしまいます。挙句の果ては「日本語はいくつ文字を持っているのですか」と逆に叱られる。私達の国は文字が一つだ。あなた方はひらがなを教え、やっと覚えたかと思うとカタカナを教える、カタカナを教えると、無限に広がる漢字の世界が待っているということで攻撃されたりする。もちろんこれはもちろん極端な例です。

(2) 事例 2

次にこれは文系のアジアの留学生の事例です。さきほどの理系の留学生と同じく初級なのですが、この学生の場合は非常に高い動機づけを持っていて、とにかく日本語で授業が受けられる、そして文献が読める、発表ができるようになりたいといった強い動機づけを持っていました。漢字に対する関心も高く、非漢字圏でありながら、何とか自分でマスターしようということで、単語帳を作ったり、絵から漢字のメカニズムを紹介する本を

借りて一生懸命に独学をしたりしていました。1学期の教育が終わり、修了式ではパワーポイントを用い、日本語で研究発表を行いました。それにもかかわらず、ほかの大学の大学院に進学し、最初はいろいろな人のサポートを受けながら勉学に励んでいましたが、最終的には適応しきれずに英語圏の大学院に留学先を変更するという事になってしまいました。やはり文系の学生にとってそれだけ求められる日本語のレベルは高いということなのだと思います。

(3) 事例3

三番目の事例といたしまして、私が担当している日本語学概論の授業についてお話ししたいと思います。ここでは漢字圏の学生と非漢字圏の学生との格差が明白に現れてしまう。もちろん漢字圏の学生というのは日常生活でも一般的に非漢字圏の学生より上手なことが多いのですが、授業になるとその格差がさらに広がる傾向にあるのではないかと思います。その理由は、授業となると非常に抽象的な用語や専門用語が多くなるのですが、それらは意味を理解できるまでの認知的な負荷が高いということで、さらに漢字圏優位という構図ができあがってしまうような気がします。その結果、韓国、中国といった漢字圏が教室の前半分を占め、非漢字圏は教室の後ろの方で静かにしているという構図ができでしまいがちです。さらにそういった格差拡大から自信の喪失につながりかねないという状況があります。

(文系の大学院生に求められる日本語能力)

1. 専門を学べる読解力・聴解力

では文系の学生に必要な日本語能力とは何かというテーマにもどり考察をしてみたいと思います。やはり日本語の専門書や専門の授業と付き合うことのできる読解及び聴解能力が必要であろうと思います。そしてそこで最大のポイントとなるのが、やはり漢字であろうと思います。漢字は専門書で占める比率が非常に高い。そして抽象度の高い場合が多い。この場合、音を聞いてその意味を理解するために相当認知的負荷がかかるわけです。そうになると、先ほども少し述べたように、特に非漢字圏の学生などは難しいということになってしまいます。では、どうしたらいいのか。先程の方のお話では、カタカナの問題も少し取り上げられていたのですが、私は漢字をより重要視する必要があると思っています。どうしたらいいのかという打開策としては、以下の三つのアプローチがあると思います。

- (1) 大量の専門語彙を習得する
- (2) 漢字運用の知識・経験を豊かにする
- (3) 辞書の活用

一つは大量のボキャブラリーをとにかく習得してもらおうという方法です。これがベストですし、日本語学校等においても専門知識の学習支援といったものをしていただければしていただくほど、私達はうれしく思います。しかしこれは学習者にとっては、無限で終わ

りなき戦い、ということになってきますのでだれもができるとは限りません。それに次ぐものとしてやはり漢字の知識、経験が豊富であれば、この漢字とこの漢字が組み合わせられているから、おそらくこういう意味であろうという類推ができるようになります。そのような経験、知識を得られるようご指導いただければいいのではないかと思います。しかしながらこれも非漢字圏の留学生においては決して容易ではないと思います。そうした場合、最後の手段として当てになるのは辞書ということになります。でも残念ながら、この辞書使用もまた非漢字圏の留学生にとってはハンディキャップがあると思います。さきほどのアジアからの理系の留学生は、指導の先生から少しでも漢字を理解できるようになるため、電子辞書を買うように指導されたということですが、買ったはいいものの、難しい漢字、読めない漢字を引く術がまったくないわけです。

年少者の日本語サポートには「取り出し授業」と「入り込み授業」の二つがあります。取り出し授業というのは、授業の前か後に、その学生だけを取り出して、その授業の予習や復習をしてあげる支援の形態です。これに対し、入り込み授業というのは同じ母語話者の人など、学習者の母語がわかる人に一緒に授業に入って横に座ってもらい、必要時に翻訳をしてもらったり、難しい用語の解説をしてもらったりする支援の形態です。後者はその授業を行う先生にとって負担となったり一緒に授業を受ける人の邪魔になったりするため、実現はそう簡単ではありません。これに比べると辞書は、気軽に持ち込むこともできますし、先生に負担がかかることもありません。いわば「機械を活用した入り込み授業」であり、もっとも簡単な入り込み授業と言えると思います。辞書が開発されていく中で、辞書はロボットチューターとまでは言いませんが、似たような役割をこなしてくれているわけです。しかし、その使いこなしにおいて、漢字圏の学生はやはり有利で、非漢字圏の学生は非常に不利であるという現実があると思います。それに加えて、先程申し上げましたように、理系の学生で漢字を学ぼうとしない学生もいます。しかし、日常には漢字があふれているわけで、漢字を完全に無視して暮らすことは現実的に無理です。そうした学生には先ほどの一番目、二番目の方法は期待できないので、この辞書活用の方法が残された最後の方策ということになります。しかし辞書で読めもしない、構造も分からない漢字をどうやって引けるのか、ということが問題になります。そこで私は、「手書きで探せる辞書」といったものがあればいいと思っています。もしかしたら探せばあるのかもしれませんが。たとえば私が知っているのはシャープのザウルスなのですが、これは電子辞書ではなくて電子手帳なわけですね。この中に非常に簡単ではありますが、国語辞典と和英辞典と英和辞典とがあります。これは手書きができますので、いざとなったら黒板や本に書かれている文字をそのまま手で書けば、活字に直し、検索してくれるわけです。そうすると、なんとか発音や意味にまでたどり着けるわけです。そういったものがもしあれば、非漢字圏のハンディキャップを埋めるのに非常にいいのではないかと思います。もちろんコンピューターを持ち込めれば、手書き入力というのがありますが、それが代用できるかと思いますが、コンピューターの持ち込みも容易ではありませんので、このような手書き入力

の電子辞書もあれば、ハンディキャップの多い非漢字圏の学生にとっては朗報ではないかと思えます。その他、最近文を読んでくれるソフトや漢字にルビをふってくれるソフトなども開発されていますので、そういったものを活用していけばいいと思えます。

(日本語の論文を書くことのできる作文能力)

続きまして、書く方、作文能力ですが、やはり理系に比べ文系は日本語で書くことが多くなりますので、ここでも非漢字圏の場合のハンディキャップははっきり表れます。そこでやはり救いになるのは、先程非常に重視している準備を進めてくださっているリテラシーというもの、読み書き能力に対するリテラシー、及びPCの使い方、辞書使用の能力等がせめてもの救いになっていきます。つまり、日本語能力で遅れをとった部分を、これで挽回すれば少しカバーができると思えますので、この辺のところを日本語学校の先生方にはぜひよろしくお願ひしたいと思っております。

次に専門知識ですが、先程、BICSよりCALPの方が難しいという話をしましたが、背景知識として専門知識を持っている人たちにとっては、BICSよりCALPの方が優しい可能性もあるわけです。つまり、母語での学習を通じ、背景知識としての専門知識は持っているわけですから、聞けばなんとなく「あ、このことを言っているんだな」と連想できる可能性があります。昨日もBICSとCALPについて教えた授業で、ある中国の留学生にBICSとCALPとどっちが難しい?と聞いたら、同じぐらいと言っていました。つまり、日本語は確かにBICSよりCALPの方が難しいのですが、母国で専門の知識をしっかり得ていれば、たとえ日本語が50パーセントしかわからなくても、既に学んだことなので理解できるということになるかと思えます。ということで、専門知識の補充も必要であろうと思えます。

また母国の学部で学んだ知識と、日本の大学院で求められる知識とのギャップが非常に大きい場合もあります。私の場合十年間韓国で教えていましたので、韓国で日語日文学科を卒業したとしても、大学院の日本語教育コースに入るために必要な知識というのは非常に限られていると感じています。ところが韓国で大学を卒業すると日本の大学院に進学を希望する学生は少なくありません。そこにおけるギャップは相当大きいと言わざるをえません。しかし、その場合に、たとえ母国語でもいいから専門の日本語教育の本を読みこなしてあれば、かなりの日本語の不足というのは補えるのではないかと思えます。ですから私はあえて母語で、あるいは英語で専門知識を補うということも積極的にお願いできればと思えます。これは授業でやるということだけでなく、例えば日本語学校の図書館にそういったものがあれば、課外的な自律学習の中で学生たちにやってもらうこともあり得るのではないかと思えます。ということで、専門知識に問題がある場合には母語でもいいから補ってほしいということをお願いいたします。

(内容重視の日本語授業)

最後に今日お願いしたいのは、内容重視の授業、つまり、入学前に日本語での専門分野の授業に慣れておいてもらえたらいいと思います。実は自分も英語を勉強する際に三つのタイプの授業に参加したことがあります。一つはいわゆる英語の授業、それからもう一つはアカデミックライティングやアカデミックリーディングなどのリテラシーを養う授業。もう一つは、私の専門の関連分野に心理学がありますので、それを英語で学ぼうと授業に参加したことがありました。そういう三つのタイプの授業の中で一番自分に役に立ったと感じるのは三番目でした。しかしこれを日本語学校だけでやろうとしたら、専門分野が多すぎてやり切れないということになるわけですので、可能かどうかわかりませんが、上級になったら、自分の行きたい大学の行きたい専門分野の聴講などを勧めるのもいいと思います。あるいはそれができなければ、大学と提携して専門の授業をビデオ撮りし、それを集めて図書館に置き、日本語学校の留学生に見てもらう、あるいは閲覧してもらうなどというのもよいのではないかと思います。これらをすべて日本語学校の授業でやる、あるいは一人の教師がやるというのは無理なことです。そのように学生を囲い込もうとはせず、むしろ「自由な時間にあなたの行きたい大学に行ってください。そうしたら授業も受けられるし、何が必要かもわかるし、先生とのネットワークもできるし、友達もできるし、友達が助けてくれるかもしれない。」というようなアドバイスをしていただければと思います。

(その他)

これ以外には、リテラシー能力を教えることもサポートになると思います。あるいはさまざまなツールの利用ということで、特に漢字がキーワードになりますので、それを容易に探せる、検索できるツールとノウハウを教えることも必要ではないかと思います。それから、専門知識の重要性ということですが、私が最後にここでお願いしたいのは、専門分野の辞書、事典をこよなく愛してほしいということです。私の場合は日本語教育ですので、学生がいたら是非買ってもらいたいと言っているのは、『新版日本語教育事典』と『応用言語学事典』です。専門の事典は恋人のように愛してほしいと思います。これを読むと専門用語に慣れ、頭の中に基本的な概念形成などを促進してくれますので、専門の辞書は高くても買うようにしていただきたいと思います。厚くても読む。重くても持つ。重いのが嫌だったら二冊買う。そういったことをお願いしたいと思います。

(おわりに)

大学院は研究者養成の機関です。本気で研究者になりたい人を探しています。研究者になりたければ、文系の場合、日本語がそれなりにできることはもちろんですが、当然のごとくその専門分野に関する基礎知識がなければなりません。研究生になってから基礎知識を身につけようというのも論理としては成り立ちますが、研究生志望の人が多い場合には、その前から独学で基礎知識を身につけようと努力している人を研究生としてとろうと考えるのは当然です。それから大学院は、それぞれの先生の専門分野を中心とした研究を行う

ところですから、学生をとる先生の側からすれば極力研究しようとしている分野に近い人、いっしょに研究をしていける人を取りたいと思うのは当然です。優秀な人を取りたいのはもちろんですが、いくら優秀でも自分の研究分野からかけ離れていれば、指導する自信もないのでとろうとはしないのが実情です。そこが学部と異なる点です。ですからその意味でも予め自分が何を研究したいのかをはっきりさせ、その上で専門書を読み、その分野で活躍する先生を探し、早め早めに接触を持つ、そうしていけば必ず道は開かれると思っています。一人でも多くの留学生のみなさんが、無事大学院に入れるよう、進路指導のほうもよろしく願いいたします。